

忘れ得ぬ人々

山本秀男

魅せられた自転車

東京・世田谷に三軒茶屋という賑やかな町がある。都心からきた大山街道から世田谷街道が分岐する地点である。世田谷街道に入るとすぐ左に大きな自転車店があった。いまは蕎麦屋で、自転車店は後ろにひっこんでしまったが、谷岡さんといって当時界限では一番大きな店だったと記憶している。

ある日曜日の朝、谷岡さんの店の前で数台の自転車の列を見た。それらの自転車は歩道の縁石にペダルを支えさせて一列に立たせてあった。今から35年前の風景である。

私は魅せられた。それらの自転車の色は不思議と思ひ出せないが、そのフォルムの美しさに見惚れたのだ。実用車を牛に見立てれば、これらの自転車はまさに馬、それも競争馬である。一様にサドルが高く、ホイールベースが短い。ハンドルはドロップで、ブレーキはワイヤー式、おまけにチェンジギヤがついている。持ち主たちの姿は見えなかったが、この人達が「サイクリスト」と呼ばれていることを、私は間もなく知るに到った。

“我が国サイクリングの歩み(NCTCの歴史)”という冊子の年表に、1954年の主な入会者の一人として私の名前も記録されているが、以来35年間自転車にかかわってきたのも、“魅せられた自転車”が発端だったといえよう。

ミッキーマウスの靴

“魅せられた自転車”と言ったが、サイクリングの楽しさを教えてくれたのは先輩であり、仲間である。結局人である。なぜか「忘れ得ぬ人々」と呼びたい人が、サイクリストと呼ばれる人の中にたくさんいた。特にサイクリング1年生時代に出会った人々の印象は強烈だった。

サイクリスト1年生の私に最初に強烈なショックを与えてくれたのはNCTCのK氏である。12月の食べるランに妻と参加するためにタンデムを借りてきた。対米輸出のため試作したもので、スタイルは戴けないが、自転車に乗れなかった妻を同道するには

もってこいの借り物であった。ところがこれをみたK氏が

「なにこれ、ミッキーマウスの靴みたい」と叫んだのだ。言われてみればそんなふうに見えるが、1年生の私は傷ついた。今考えると大変良い教訓を戴いたと思う。以来私は、新人の自転車に対しての論評はしないことにして今日に至っている。



板橋区徳丸、1957年頃

言いたい放題

天野義雄さんは銀座の砂場という蕎麦屋のご主人だったが、手品は一流のうでまえてあった。人間川の七夕祭りを泊まりがけで見物に行ったときのことである。扇町屋の旅館では、蚊が出るので、夕食後は蚊帳に入るしかなかった。そこで天野さんの手品となったが、あまりの鮮やかさに思わず「もう1回」とアンコールをしたら、叱られた。手品をみるにもマナーがあって、アンコールをしてはいけないそう。あの親父さんに言われるとなる程と思う。

聞いた話だが、「夕日が顔に当たっている」という話も有名だった。1950年代の南多摩を今想像することは困難であるが、とりわけ世田谷街道は変わってしまった。小田急の線路に絡むようにして走っていた世田谷街道は、山中の道に似てしばしば方角を変える。従って東京に向かっているからといって背中に西日が当たるとは限らない。

「おいリーダー、私達は東京へ帰るんだぞ。見ろ私の顔に西日があたってるとじゃないか」

若きリーダーは道が真っすぐでないことを納得してもらうのに骨をおったとか。それでも憎めないのはなぜか。風格といおうか、なにかがあったのだ。

天皇と父と兄貴

当時のNCTCは会長は和田文平さん、副会長は菅沼

達太郎さんであったが、理事長の前田安雄さんだけがしばしば天皇とよばれていた。私など近寄りたがたいところで、天皇というよびかたに何の抵抗も感じなかった。その天皇から発破をかけられたことがある。東京都民サイクリングの時である。コースは日光で、いろは坂一湯の湖の往復である。その日はお手伝いとして、しんがりをおおせ付かっていた。ところがダウンヒル恐怖症の方が一人いて、湯の湖から竜頭の滝、中禅寺湖畔、いろは坂と、帰途の全行程をブレーキをかけっぱなしで下って来た。私は追い越すことは役目柄出来ないのにおなじくブレーキをかけっぱなしで降りて来た。ところが私のM社の新製品のブレーキシューはゴムが柔らかくて、おまけにリムのサイドが滑り止めのパターンになっているので摩耗が著しく、1年分相当を1日で摩滅させてしまった。そこで前田理事長いわく、「山本君、こんな坂を下るのにそんなにブレーキをかけなきゃ降りられないのか」多分、走行技術を磨けと言われたのだろうと思ったことであった。

○

めったにお会い出来なかったけれど、菅沼さんこそサイクリストの父であったと、私は思っていた。業績から言っても異を唱える人もいないと思うが、私は人柄にひかれて来た。あの度の強い眼鏡の奥で、ひとの話を聞くまなざしに、父親を感じたのだ。半原近くの古い製糸工場に沿って走るサイクリストを撮った写真が“サイクル”に掲載された事があるが、まもなく菅沼さんから葉書を戴いた。

「いい旅をしましたね。これからも続けてください。」

簡潔な手紙にいたく感激したことであった。

○

1955年5月、創立10周年記念の“木曾路ツアー”に参加した。初めてのサイクルツーリングである。参加者は16名だったが、殆どの方が先輩であった。今にして思えば、“魅せられたる自転車”も実に多様であった。このツアー参加者の世界のブランド商品は僅かに興津武雄さんのプジョーのランドナーだけであった。あとはノーブランド、つまり国産だがハンドメイドという羨ましい、そして憧れの自転車だった。私のと言えば、27インチ×11/4のタイヤをはいたロード・レーサーで、ギヤが50-47のダブルでリヤは5段がついていた。

さて第1日の山場、鳥居峠に差し掛かったら足の

回転がほとんど止まる寸前になってしまったのだ。若さと日ごろの鍛練にものを言わせて何とか頂上までたどり着いたが、それは難儀だった。そのとき初めて先輩の知恵に頭を下げた。



岩手山、1958年頃

○

リーダーの山田鉞雄さんはワイドレシオのスターメイ・アーチャーのハブギヤFW(4段)、横尾明さんは3段だが、チェーンホイールを44にして山地に備えていた。興津さんのプジョーのランドナーは、足がくるくる回るような低いギヤ・レシオだった。機材の差をまざまざと見せられた。後年スカウトされて自転車を作る人になったのも、このサイクリング1年生の体験が作用したのではないかと、今にして思うのである。

かくして私にとっての兄貴たちは、機材の重要性を十分に教えてくれただけでなく、その後、続けて走行テクニックについて様々なことを教えてくれた。中でも忘れられないのは、急降下滑降法である。清水支部の杉山さんの論文を読んで、小学校の運動場で一所懸命練習をした。後に、ダウンヒルの途中で子供の飛び出しにあったとき、この練習のお陰で子供を引っ掛けずにすみ、かつ転倒を免れた。

こうしてみると、兄貴の存在の大きさを感ぜざるをえない私である。

やまもと・ひでお

サイクリングを始めたのは31歳。3月からNCのスタッフに加わった。人を和ませる術を心得ている不思議な人物である。この人もサイクリングの歴史を語る一人である。

NCの前身・サイクル、光風自転車→ゼブラケンコー自転車(工場長)→78~87年・サイクルハウス・コンパ(シヨップ)と活躍し、その間海外へ技術指導にも精力的に飛び回った。

自称「自転車おじさん」で10年を過ごしたと言う。

1923年7月生まれ。横浜市在住。

(NC誌89年7月号)